建築デザインⅠ

課題
郊外型の戸建住宅地

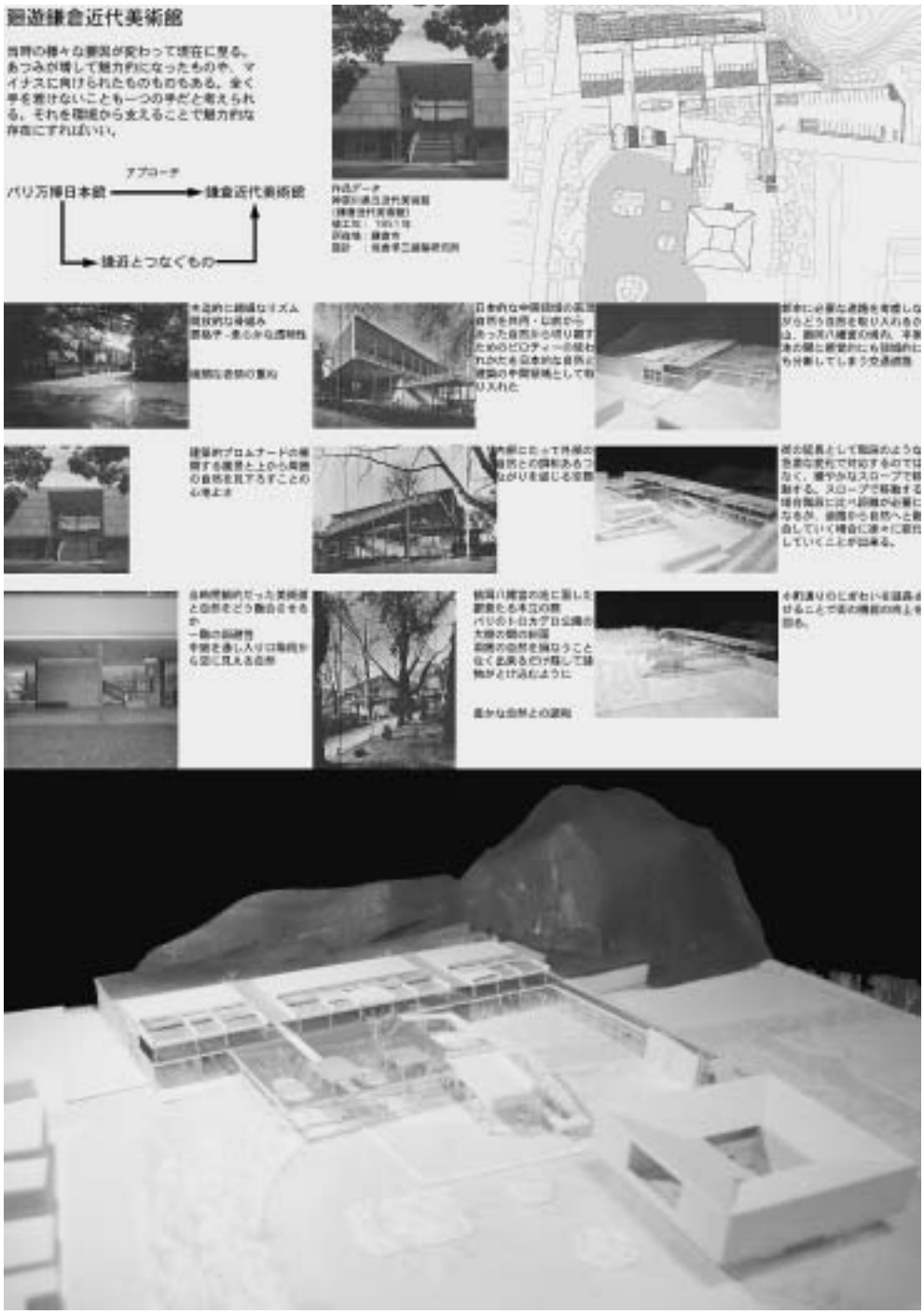
担当：
小泉　雅生

佐藤　崇文

この課題はどこにでもある戸建て住宅地の再生です。土地性はなく、戸建て住宅が抱える問題をいかに建築的に解決するかがこの課題です。
私はこの住宅地に見られる住宅間の隙間空間に着目しました。この住戸間の隙間は空間として使われずただの隙間であり無駄なスペースとなっているのが現状です。庭も隣家の目が気になり使いにくく、庭があること、さらに土地を所有することが認識されていません。住宅が改築時期を迎える際この問題を解決する改築システムを提案します。
手法として敷地境界上に壁を建て、既存の住宅の外壁を用い今までの住戸の隙間に空間をつくります。隙間部分の空間ができたら今までの住宅を撤去します。いわゆる空間の反転です。今までの外部が内部となります。コートハウス形式をとり、庭と無駄とされてきた住戸の隙間を空間として活用できます。
住戸の隙間は意外と使えるものですね。

指導＝小泉　雅生

典型的な郊外型の戸建て住宅地を課題の敷地としている。17戸が並ぶ敷地はそれぞれゆとりあるものとは言い難く、にもかかわらず建物周囲の中途半端な空地を見れば必ずしも望ましい方向で建物と敷地とが応答しているとも思えない。現実にはこういった郊外型の住宅地が数多く生み出されている。
この課題では、様々な角度から郊外型の住宅地を再検証することを期待した。街並みの問題、日照や通風といった環境的な側面、建て替えにまつわる構法的な問題、既存の住宅の部材を再利用するといった地球環境的な側面、土地利用に関わる経済的な側面…。そういった種々の問題にすべて回答することは困難だとしても、修士課程の設計演習としてある程度リアリティのある提案を行うことは非常に重要だと考えている。
佐藤君の提案はそういったリアリティを確保しつつ、地と図を反転させ旗竿上の敷地形状を生かすことで、建築空間としての提案を行うところまで到達している。逆にそういった制約の下でスタディを行うことで、新たな建築空間の可能性が見出されたともいえる。ともすると「お話」に終始してしまいがちな課題設計で、実際的かつ可能性を感じさせる提案が行われた点は評価されよう。



平湯　友信

建築デザインⅠ

課題
神奈川県立近代美術館（坂倉準三）／鎌倉市雪ノ下

担当：
水谷　碩之

平湯　友信

ここでは建築のたたずまいというものに重点を置いて設計しています。本体をいじることは坂倉が感じたコンテクストを否定することになると考えました。現実的な話をいえば本体をいじるべきなのですが、この建築がつくりだすコンテクストを崩すことは私の理念としてできませんでした。あくまで本体の引き立て役に徹する方法をとり、プロセスとして坂倉がとった手順を追うことで、二期目の新館でなく全体での建築を提案しています。

指導＝水谷　碩之

平湯君の案は、坂倉準三が設計した神奈川県立近代美術館を現在の位置にそのまま残し、新たに鎌倉駅から人がアプローチする小町通りの延長上に美術館を増設することで、現在の美術館を含め回遊させるシステムを構築して、新旧併せて新たな美術館として再生させようとするものである。

この案の着想は、周りの自然環境を含め、ほぼ風景の一部となっている、現在の神奈川県立近代美術館を、そのままの形で残すことから始まっている。エスキースの段階では、どのようなシステムで増設する美術館と連絡するかということが問題となった。地下で結ぶ案も検討されたが、最終的には増設する新しい美術館を開放性の高いものとし、坂倉準三のパリ博の日本館を下敷きにすることで、二階のデッキでオープンに繋がる回遊案となった。

作品としては端正なまとまりがあり、評価できる。

この課題では外の学生を含め、現在の神奈川県立近代美術館におけるたたずまいの美しさを、どのように扱うかが大きな問題となった。建物と周りの環境の関係における建物のプロポーションの大切さや、形態のあり方まで勉強ができたと考えている。また日本の近代建築について、特に坂倉準三の建築については、私が約10年間坂倉先生から教えられたことを、失敗談を含め受講した人達と話し合うことから、建築の設計におけるプロセスの大切さを指導した。